連作詩篇

魔の満月・第四部

紙田　彰

プロローグ

憧れて風雪数千年の都市に至ってみれば今まさに時代は肛門期である　半身が獅子の乙女を殺めた秘法は肉に刻まれた奇怪な符号に充たされているがあのアンテイゴネエの父親における罪業は素晴しき知の畸型児として追放に価する　飛行場はこの危険な招待客に対して深く閉鎖され女神の座に膜掛けた彼の盲に対すると同様に極めて慎重な態度をみせている　エルドレにとってそれ故唯一の標識とは深い雪に匿された管制塔の内部に組み込まれている銀色の自働器機群の奥に響動めく電子の世界を独特な装飾で律する不思議な摩擦音というべきであろうか　広がりを誇示し豊かさにあふれることを示す白亜の巨大な樹霧に囲繞され円形に刳り貫かれたその土地を眺めてエルドレは人の子は空からの贈り物に乗って不時着したというプラトン期からの伝承を想い起こす　それは実に臍の形状である　多

種多様な形や色彩さらに匂いや舌触りによってはじめてそれと分かるあの窪み　また内部に引き込まれていった肉の筒の残骸　おお彼の腸によって世界の内と外始まりと終わりは逆転させられているのだ　それ故に登場人物は物質の内部に秘匿されている非人称であるエルドレはあの乾燥期の神の苑のことを思い出す　澄明なまなざしと無謀な行末に対する狂気とをあわせもちながら　聖地ラドルは底なしの沼のように円形にたえず沈下している一対の空洞とそれらに挟まれた小高い隆起とまたその丘に直角の方向をもつやや小さめの楕円形の洞窟を中心にして球体を構成している　それら三つの穴は無限の力を秘めた恐怖の渕と称ばれていて花苑はその周囲にまで拡がっている　エルドレが特に好んだのは二つの畏ろしき渕に挟まれた小高な丘陵地帯である　湿潤期にはボウという帯状の色彩かな植物がその一帯に隙間なく咲き誇り恋人たちはその甘美な蕊の胸の奥深くで浮游しながら交わるのだ　それはまさしく誕生の大海原である　その柔かな渦の中で人々は栄光の輝く輪を与えられ原生動物の快美な祝福に包まれる　エルドレの脳裡を掠めるのはだが湿潤期の去った後に訪れる乾燥期のボウのことである　ボウは恋人たちを母のように包んだまま綿毛状に結実してあのなだらかなそれでいて最も高い丘がそのまま険しい断崖となっている土地を純白の丘に変貌させる　それから徐々にあの忌わしくも気高い両の渕に引き込まれ

てゆきボウの丘には丁庭聖地ラドルの外形にそっくりそのままの球体が無数にへばりつくのである　人々はその季節のボウの丘を転生の丘あるいは鬱鎖の苑と呼んでいる　地質学的に検討するならばその丘は人類の鼻骨が進化に従って高くなるのに符号して僅かづつながら隆起している　エルドレは操作機器を手前に引き寄せるとブリザードの中を赤い炎とともに突き進んでゆく　おお何という悖徳が　とはいえ近親姦の最たる狼男の史実に沿革家の優し気な唇が淫らな微笑を投げかけている　これは白昼の文明を凌駕する冒険の悲歌となろう　広大な山岳地帯はまさに眼覚めんとしている　骸骨の晒りと称ばれている八千フィートの山がその最高峰である　これを中心に英国式六角星形に遠々と枝脈が伸びて渓谷部にはそれぞれ特色のある六つの疎水が繋いでいる　ああかって八千フィートの雄大さを誇らんとしていた骸骨の突端はだが神の意企を越え出でて己れの叡智を欲しいままにしている族の野望によって見事に抉られているではないか　はたまた六つの疎水によって大カルデラを六つの山脈に区画するとは　紀元前には金粉裸女の柔らかな爪が謀謀術策に嬲びている　神の治し召す古代暗号の全貌を解読する智性は秘密結社の悪徳に向けられた血の供託であろうか　倒立して地下に咲く植物の花弁は封鎖された舌の断面図に舵首を向けている　海洋は恐怖の羨望からは遠く隔てられただ狂気の星座を計量している　おお寡黙

なる荘厳さ　汝らは決して下僕の運命に甘んじてはいないだろう　大陸の都市には血統を押し流す大河川が横たわっている　そのようにエルドレの目指す土地には飛行場だ　まさしく亀裂　阿片常習者の呼吸法は東シナ海の喇叭の形となる　あの静謐なる八の字は尻軽な化学者どもから生殖器を引き抜いてしまう　彩色の夜とはいえ唯一の空洞である月の博学な咒縛は覇権に関しての調査資料とは別箇の緑地である　記念碑はだがどのような材質のもとに火箭となるのであろう　砂漠には王侯の同盟軍が到着している　闇には禿鷹も就眠する　こんもりと土壌は隆起しながら出産は始まる　宗教史家や数学者獣医律法者や地理研究者とりわけ天文学者や産婆戦略家植物図鑑の著者や紋章学の先達錬金術師遺伝学者また風土記編纂家園芸家それらの長たる力学者地質学者設計家医者統計屋生物学博士系図学者さらには黒魔術の道士光学器械の技術者曲芸団の親方それから語学に精通している学匠派司祭海洋博物館長それに物理学者手品師預言者通訳そして参謀司令官が聖十字の怯懦に付き添っている　この崇高なる崖ははたして無痛分娩となろうか　人身売買は法制化される　カシオペア座の幾何学的な鶏姦は探検家たちの主要な椅子である　おお銀箔の海賊船　植物採集者の掌にはピラミッドの侵入経路が彫り込まれている　手首は首狩族の神格だ　象牙色の壁に吊られた渚の水彩画から迸しる浜水によってその部屋の時間が碧の化粧

をすることはないだろう　欲望に屹立する海蝕の尖塔　白鳥の群れる岩　船着き場では荒くれどもの唄声が太陽を串刺しにしている　眼を剝き出しにしているエルドレよ　純白の雪どもを裏切りながら圧倒するほどの極地の希望は何処の永遠に処せられているのであろう　その乗物は不思議な微光に取り巻かれている透明な容器である　彼は六芒星の中心部に円く広がっている人工の平原に突入する瞬間にこれほどの憎悪それも偏執的なある謀みを完璧な静寂によって示しているこの純白なる基地を一望に捉えている　全身は今や最後の圧力にひしがれ硬直している　そのまま真白な闇へ埋もれてゆくのである　数時間の経過が絶望の深い睡りから頭を擡げついにはそこからエルドレを引き上げ徐々に彼の躰を癒してゆく　ああこの新鮮な冷気を鼻孔に膨ませて最初の挨拶を六柳の木霊の相乗し共鳴し合う中心点で送っているのはもう疾うに雪に埋もれたフネを惜し気もなく見限ってしまった異郷の訪問者なのだ　あの幾多の新大陸に漂着し神と女王と肥沃な土地とひょんな幸運を祝福し自らをこのような苦難に陥し込めた諸々の事情と何よりも神々を深く呪いただ復讐の女神エリニュスに誓って土人のように逸物にまで彫物を施した船乗りたちが大地にその髭だらけの顔を埋めて接吻するように一人の男が気違いさながらに雪の中で跳いているのだ　この飛行場を管理している基地はだが荒れ狂う暴風と厚い雪の層と六つの方角に伸

びた山々の内側でひっそりとこの様子を覗っている　まるでそれが最大の敵意に相応しい歓迎の仕方であるかのように　数種類の立派な紋章をもつ結晶体が躰を蝕んでゆくのに従ってエルドレは逆に冷静さを取り戻してゆく　滅菌状態には慣れっこなのだと言い聞かせて　食糧袋の隅に転っている褐色の錠剤を口の中に放り込み舌の上で転がしていると濃のある重い甘さがじわっと液上に広がりそれが喉の襞筋を潤してゆくと全身の血管が活発に収縮を始め尻や爪先が赤くなるほどに火照るとまるで宙吊りの刑を受けたように十センチメートルほど躰がふわっと持ち上がりそれから凧か風船の如くに風に吹かれて広場の南西の隅に辿りつくという魔術が行われる　羊皮紙に認められた預言でもあれば幽霊どもがさぞざわめくであろう　三人の妖婆がいれば蛙とか蝙蝠とか尨犬の舌とか豚の尻尾や鶏の頭をぶち込んだ鍋を焔にかけてもてなしてくれるであろう　だがそこは錬金術の工房ではない　つるつるとした始まりとともにあった巨大な岩によって猛り狂う吹雪をようやくに凌げるに過ぎない崖っ淵なのである　エルドレは赤褐色に焦げつき硫黄臭のする地面に横たわる　エルドレはともかくも緊急にこの地の住民に出会わなければ生命に重大な支障をきたすことを熟知している　広場の下に厖大な機械装置が設置されているということは不時着の際にその電子の唸りを導きの糸にしたのだから間違いはない　そのとき地上にあらゆ

る生物の棲息している痕跡を認めることが出来なかったのだからそれらは地下に匿されていると推測する　だとすれば何処かにその入口がある筈だ　仮にフネを廃棄したあの中心点がそうであることも考えられる　それならば疾うに彼の到着は知れ渡っているのだからあの最後の圧力に耐えたときに入口を示して呉れたに違いない　しかしあそこのみならず全域において未だに何の徴候もないというのは彼を警戒しているからであろうか　確かにあそこが入口なのかも知れない　だが閉ざされた入口は開くことはない　扉はある種の族にとって閉ざすためのものでしかないのだから　エルドレは絶望に充ちた確信に有頂天となる　その確信の絶望に充ちた歓びは聖地ラドルでの妹とともに味わった感情と同じである　あのボウの咲き乱れる丘で情事に耽けっていたときにその相手が妹だと分かった結果エルドレはありとある愛の優しい腕から引き剝がされ神々を呪いただ激しく憎悪の金色に輝く精液をボウの丘に撒き散らしていたのだ　最愛の女は強い自責と悲しみの念だけで淫売のようにボウのほとんどの恋人たちの間に確執の種を植えつけていったのである　絶え間のない呪いと快楽の絶叫のうちにあの気高い七色の光はたちまち光を失ない混濁し暗黒の帳を降ろしてゆく　エルドレは呪いの丘から逃げ果せた唯一人である　悔恨の季節が訪ずれ幸福に藍入られている筈の聖地ラドルは初めて乾燥の悲しみに包まれる　ボウの丘は

矢張り真っ白な綿毛に蔽われて眼孔の底知れぬ中枢に吸い込まれてゆく　おお際限のない不幸と嘆れを秘めて聖地のコアはハデスの王とその三つの頭をもつ犬どもの下に悪徳の巣窟となり再びあの美しき愛の交いの丘は瑞々しい潤いに充ちた光り輝く大海原に蹈えることはなかったのである　エルドレは最愛の妻エレアが妹であると知ったときにこうなることを確信していたのだ　ああ、あの優しき乙女が狂気の世界に召しいられたときに何故にともに狂気と背信と悪徳の快楽へと沈み込まなかったのであろうか　あの流されたどす黒い病いの血に充たされた海の底へと

一

岩窟に刻まれた扉は開き戸ではない　灯影の妖し気な揺らめきにも似た地下への最初の踏査は疾うにダイナモの白熱的な好景気になる　我が主人公〝物質の幻惑〟は古代史のうちを徨っている　ポラリザシオンに関する諸々の作品行はすでに皆既蝕のただなかにペンギンどもとともに金環をみせて結晶している　百数十種の奇態な動植物の浮き彫りに装飾されている自然石　象牙製の角杯に巣喰うグリュフォンやミトラまたは爪先立ち両手を差し

伸べるエロスを高々と頭上に掲げる勇者の宴は祭奠の頌歌をあふれ出させている　おおこれら象形のガーターよ　鍵穴や錠前や暗号もなく重力の鳥渡した均合いによって轟音とともに財宝を示すのは母なるイシスの言葉である　言葉はさらに言葉を喰いながら大いなる衍文に興じている　未来的な断言に過かれている網膜反応は何という風呂屋の安っぽい鏡なのだ　火葬場の竈の高熱状態へとなだらかな上昇曲線を送げてゆく地面の火照りと魚のような臭気を発する硫黄ガスが肢体を充分に浸してゆくとそれに伴いエルドレの緑の望郷は寸断される　白紙の平原の縁辺はそれほどに鋭く険呑な切り口となっていて活動期の火山の証拠が叙述されている　だがそれもこの断崖を中心に数百メートル四方の凹凸の部分だけであり右方の崖下には白雪に洗われた古代樹木たとえば月桂樹の幹や枝が骨を剝き出している　左側は漆黒の緞帳を垂らし忌わしく危険な儀式を執り行なう祭壇を思わせるように鬼々凄々とした瘴気が漂っている　そしてエルドレの真下では湯立った血潮が炎を吹きながらどろどろ渦を巻いている　谷底のそれらの境界がどのような魔法によって縁り分けられているのかは知る術もない　だがその妖婆の鍋底から弾け飛んだに違いない巨石は火山岩でも火成岩でもましてアルケミーの産物でもない　丸くつるつるとしてひとときの安らぎを与えてくれた巨石は古代から宇宙の衰退を凝視めていた白亜の卵なのである　そ

れは主の誕生とともにありそのまま孵ることなくその悲しみを充溢させて石化したのである　石の周囲を歩いてみると歩数にして十三の聖なる数を得ることができる　表面には無数の図形と目盛りそれに記号が細密に刻まれている　離れて眺めると神々の造りたもうた生命の種々相が蔓草の絡まりのように綴られまさしくあの百科全書の扉となっているのだ　この北極の位置にはピラミッド型の小さな突起がついていて雪の積もっている側から這い上がって覗き込むと数行に分かれたアラビア文字を認めることができる　これこそ名高い最初のアストロラビウムであろうか　表面を蔽っている雪の膜を払い退けると耳を蓋ぐような大音響とともに突風が襲い谷底の灼熱地獄へ誘おうとする　エルドレは〝黄金なる永遠の液体激しくも迸しり〟という第一行を読み取る　これはあのアル・ファザーリ父子の父親の手によるカシータの詩行に相違ない　さらに素早く読み継いでゆく　〝××に夢の只中徨いて〟〟廊の声音なるか聴いどれの××……〟　そのときこの巨大な天文器械は千二百年の静止を破ってぐらりと揺れる　熔鉱炉の熱と渦の吸引力が崖の際を浸蝕し始めているのだ　卵石はだが一メートルほど転ったに過ぎない　まだ一メートルの余裕が残されている　エルドレは反対側の底に滑り込み持ち上がった一メートルの球面を調べる　その面には〝星の知識の書〟というキリスト教徒の作成したアラビア暦表とともに放物面鏡や

円壔鏡の図とが並べられていて上方に〝アルハーゼンの問題の単純化は世界の明解である〟という命題が記されている　おおアルハーゼン　光学の父よ　眼球の発見者よ　なんというメールヒェン　匿されていた箇所は今なおびかびか磨き上げられたままの平面である　エルドレは食糧袋の一番手前のポケットからネクトルの入った小壜を取り出しその中身を平面の細部にまで塗りつける　それからかじかんだ手で雪原に対して六十度つまり謎の一メートル四方のびかびかの面に直角に対する穴を掘る　巨石はみるまに谷底の血の池と同じ色までに赤く輝んでゆく　地面がぐらぐら揺れその裂目からは熱湯とともに激しい勢いで蒸気が吐かれている　浸蝕はさらに劇しく執拗に次なる獲物を待ち設けている　エルドレは穴の中に潜り込むと真直に岩を正視する　あのびかびかの箇所が正面に輝いている　何という冬眠　何という冷厳で静寂な磁力なのか　またそれ故に澄明で永却の底なしの智の泉と見紛うほどの透明な光が充ちあふれているのだろう　灼熱に燃え上がりいま巨大な火の星辰に膨れようとしているこの天球の裏面にナルシスの豊かな泉があふれている　その清幽の底から黛きを顔中にあふれ出させたあの憂しきエレアが現われる　おおこの黛きと黛きの身をも引き千切る歓びと歓びのそして耐え難き悲しみと悲しみの相乗作用が一瞬のうちに生じたときに扉の謎は明るみに出されエルドレは胸の裂目に封じられその空洞へ

と羽搏いてゆくのである　聖地ラドルは塩水湖であろうか　諸々の族がアメリカーリアの長い脚と丈夫な爪をもつ　海豹は悖徳の第一印象であり紫羅欄花や金蓮花の密生するゴム製保護具の波繁吹を冠る　眼がまず入口である　光は栗毛色から青色への跳躍さらにオレンジの地中海的綜合へと結ばれる　海褸頽の絶大なる栄光の輪に承諾された鱗い　もしくは謀り事のとめどない潮　言葉を仮りたメロディはいつしか波々を病ませ水底の爽やかな藻や憎しみを封入した貝たちの上に妖しき緞帳を垂らしてゆく　そこにはアルバの粘土製模型やテルメズの彩釉陶器やまた鉛の容器に収せられた甜瓜が華やかに密封されている紙上の運命と題する三面記事には斎戒厳重な鉄道を二人の嬰児が転覆させたと誌されている聖地ラドルの王であるオルリー公は長い白髪を背に垂らし黄金のこれも長い鬚を逆立て珍華な宝石をあしらった儀礼用サーベルを天に掲げて湿潤期の生命を祝いでいる　〃終わりは始められここより始めは始められる　ぬかるみのこの季この丘は栄えある眷族の激動の嵐のために設えられ永えの遊迂に則って至福に充ちたこの日より半歳の間この輝かしき威沢に喜びと涙と漿液をとめどもなくあふれださせよ〃　輪廻の絆ともいうべきこの祝詞は果ても知れぬ神の代より引き継がれ王の逞しい首には以前に流通させようと企んで頓挫したポッパーの金貨が罪の輝きをもって活れている　叡智に充ちた眉間の広場また催眠の

大通りは若く香ぐわしい雌雄の高い鼎の声にわきかえっている　儀式はアルカナのまま七色に変幻する優しい蔓の中で続けられる　ボウが神の光を浴びて鮮やかな茵をつくるとその中に横たわる娘の七色の光沢をもつ髪はボウの魔力によっていっそう美事なものになり娘はその長い柔らかな繊維を燦々たる陽光に靡かせ惜し気もなく白い裸体を開き聰明な水晶の眼を輝かせる　オルリー公の愛玩しているそれぞれ毛色の異なった七匹の猫が上気した深い緑の眼を大きく開いて進み寄る　ボウの七色の波がさわさわと揺れ始めるとその奥の方からたたたたたと次第に速度を増してゆく頽情的な原始のリズムが広がる　王家の指環を管理するように長い尾をぴいんと突き立てて歩み寄る牝猫どもは尻と口から甘酸っぱい匂いを撒く粘液をしたたらせている　そうして一斉に白い腕の娘の柔らかな中枢へ赤く怒張させた舌をぶらさげて挑みかかるのである　生後十七日目の幼児を盗んで人形ごっこやボール投げに用いたりままごとの材料にしたりした三才の女の子たちのように温かな母の夢をみる　これは母性の夢の形象また花売りに女装して母親の営む酒場を訪れるトルソーだ　カランチョや狐や有翼のスフィンクスに混って巨大な尻を揺すりながら塁地の一方の守護者である真っ黒な象が灰色の牙を天に突き上げる　そのときオルリー公の屈強な七人の従者が大樽に封入されている秘薬を口腔といわず眼孔といわず長い鼻の通路といわ

ず尻の穴も含めてあらゆる壁の奥にぶちまけるおおどうだ　つぶらな瞳がいっそう優しく潤み白い腕の娘の頭上に何ともいえぬ不思議な匂いを落としてすでに大きく口を開けている母なる象の女陰が彼の娘を呑み込もうと誘っているのである　誘惑の作法に則って激しく脈動する血管を纏れあがらせた華奢な娘の首が二つに割れた固い岩の柔らかな芯に吸い込まれてゆく　この光景に魅せられ痛く感動したオルリー公は壁を切った情欲の虜となって長い鞭のような舌をもつ犬どもと黒人とを相手に自分に課せられた儀式の一こまを存分に堪能する　ひと通りの悦楽が頂上に達っしようとするとボウの苑の最もぼんやりと霞んでいる場所からエレクトラム製の耳輪をつけたアンドロギュヌスのテラコッタが引き出される　人々はその台座の周囲に拝跪し特殊な振動数で作曲された讃美歌を唱う　ラドルの全貌が共鳴し人々とボウの音楽が神聖な調和を生み聖地の燁かしき秘法が純白の像の臍の箇所を唯一の喘瑠へと結びつけるのである　あの若い王妃白い腕のひときわ美しい巫女は人人にエレアと称ばれている　おおエレーア　エルドレは暗箱の冷えた洞窟の中で叫ぶ　その声のぶつかる向こうから水晶のように燦く人物がまた叫びながらエルドレの方に駈け寄ってくる　かくして邂逅は異郷の地でなされるのであろうか　呪われた恋人たちは今や相手の躰に触れんばかりである　おお悪夢はどのような精神作用の変化を促すのだろう　恋

人たちがともに相抱こうとする寸前胸と胸との間には非情な壁がきって落とされる　厚みのない極度に硬く氷のように凍結し透き通った壁　エルドレは硝子を通した向こうに貼りつき絶望の眼を見開いている人物がエレアではなくエレアにそっくりのそれも女ではなく男であることに気がつかねばならない　セント・ピーターに在留を許されなかった博士はだが目玉を狙う肉屋から保護してやったカプリの幾万羽の小鳥たちによって天国に匿されている動物どもの楽園に招かれる　この翼のある優しい生き物は籠をあけると空へ向かって翔び立とうとしていつもその鋭い箭を化粧台や窓枠に嵌められた凝固した泉に端折られてしまうのだがコレラの流行したナポリで修道尼にキッスした医学博士ならばこの忌わしいプリズムを小鬼に命じて取り払ってしまうだろう　エルドレは自分自身の影を凝視めている　その影はだが別の生き物のようにエルドレとは異った険しいまなざしで彼を射縮める　おおこの世のものではないエルドレは影などではない　紛れもなく愛しいエルドレ塞き止められていた欲望が肉体を再生し二人のエルドレの唇を重ね合わせようとしている何という冷たい感触をもつ優しい接吻だろう　おお彼らは水晶のうちに惹き寄せられ吸い込まれてゆきこの鏡の内部に封じられる　宝石商の裸体の娘が残した金剛石の赤い痕よ彼らは交わるあのテラコッタの性器のように　だが流され充溢するのは聖地のコアの石炭

袋の暗黒の夥しい液である　無患子の硬い種子に封ぜられて船乗りどもの嚢だらけの海図が展げられる　半透明のペルガメントの表面には粘菌類の長い旅と永久運動の蹴鞠が揺れ動く　庭園の水晶時計が美に関するアリストテレスとの夢問答を噴射する　時狩りが鐘を鳴らし断食の一日を告げる　雲の上に並べられている多彩色の壁画は燻象の法のよい標的である　二人のエルドレが重り合った鏡轍の中では十三の約数を再び総合して第四の完全数を作ろうとしている　船に設けられた仮面劇場では巨大な張型を振って王国の秘話が再現されている　粗末な壁に括られた棚に差しかかる茶褐色の日光　あの貪欲な繁殖力をもつ小動物に助命された円形の大広間　風琴の物悲しい細工で世紀の恨みを晴らした老女　おお血の儀式は亡霊どもを呼び寄せる　吊り庭は石炭袋に吸い取られるだろう　カタコンブの六つの実験室にはあらゆる塩が網羅されている　恋する悪魔は何処にゆくのだろう　マンドラゴラの谷間には丸木舟に括られた若者が定めに沿って流されてゆく　開門　そこから恐ろしいまでに爛れた鮪を燃え上がらせて鴉りょうが若緑に包まれた清澄な水面を滑って出発する大樹の精は岩穴に棲む才走った小男に滅ぼされたのであろうか　青い魚が薔薇十字に辿りつき透明な花弁の下を泳いでゆくと黄金の彫鐫ができあがる　エルドレは胎内で

夢をみるエルドレの胸中でも成長するものがいる　そして開門　厚みのない世界から出生したばかりの男の周囲にはごつごつとした岩壁がみられそれはゆっくりと収縮している　長く暗い洞窟のいたるところの窪みには苔や黴や蕨などの陰性の植物が繁茂している　天井や壁面また地面のところどころに得体の知れない悪臭を発する海綿状の柔らかな岩石がこびりついている　奇崛な岩肌は地下水の重い湿気に被われ暗い穴の中で黒陶の光を帯びている　壁に触れるとその重い輝きが粘液性のものであることが了解できる　そして食肉性の根や莖に付着している鋭い棘が掌に喰いつく　強い酸性臭が立ち罩め獲物を絡め取ろうと獰猛な蔓が伸びそれらと軌を一にして洞窟の全体が急速に収縮する　エルドレはこの奇怪な運動によって反対側の壁に弾き飛ばされる　このように繰り返し弄ばれるうちに衣服のあちこちが裂け背中にへばりついている吸血鬼どもはその破れ目から侵入しエルドレの皮膚を引き剝いでゆく　その運動はだが空洞を消失させてしまうほどの激しさには至っていないひりだされながらエルドレは痛ぶりの地震の中を一目散に駈け抜ける　だがその逃走の行手には背中や脇腹や顔面からしたたっているものと同じ色の炎が燃え上がっている　焦げる海　紅に蝕む化石　焙ける薔薇　面会に来ない父たち　エルドレは吸血植物の触手やその口腔いっぱいに湧き上がるどす黒い唾液に脅かされただ闇雲に炎の障壁めがけて身を投げ出してゆくのである　だがそれは純正の炎ではない　あまりに鮮かな炎の彩を

吐く一枚の布なのである　繃帯布は血だるまのエルドレを迎え入れ大きく膨らみ翻える
同時に夥しくあふれる血液を拭い取ってしまう　緋色の扉はなお一層生き生きと燃え盛
りしっかりと出口を遮断する　おお茫然自失の霊立ち尽すエルドレ　大いなる幸運と安逸さ
にふーっと肺を萎ませ息をすっかり吐き出して完全な脱力状態に陥ったその刹那横あいか
ら高い気合とともに太い腕が伸びがっちりと両脇を拘束される　エルドレは眩暈と脳天を
貫く痺れと激しい呼吸困難に打ちのめされる　充血した指が音をたてて倒れ銀色に煌く穂
尖を天に突き赤銅色の逞しい腕を重武装で被った二人の衛士に両腕を掴えられているのだ
息切れが波頭のように押し寄せその頂点でほとんど窒息しかかり足許に焚を咲かせた金
雀枝が熱風に煽られ優しく笑っているのが目に灼きつくと頭の重い蓋が抜け飛んだように軽
やかな安息にのめってゆく　その暗いレトルトの細いくねった管を伝って滾々とした荘重
な低音がふつふつと昇ってくる　〃聖なる一切を穢すものは自然の生理によって自然の汚
濁へ還えることになる〃〃悪霊は地底に転落し世界は灼熱の業火によって舐め尽くされる〃
これはアベスタの一節であろうか　甘酸っぱい味覚が夢の中を潤すことによってエルドレ
は再び混濁した液の底から掬い上げられる　純白の頭布と顔を覆う布によって眼球だけを
異様に目立たせた人物がエルドレを取り囲んでいる　それから腕と脚とを頑丈な鉄枷で四

隅に引っぱられ固い寝台に仰向けに括りつけられているのに気づく　拓榴から抽出した興奮剤と山羊の乳とで醸された呑み物が口腔から喉へ快よく広がる　七人の司祭たちは疾うにエルドレの皮膚を第三層まで剝ぎ終えびくびく跳ねる筋繊維を露わにしている　エルドレはだが皮剝ぎの刑の恐ろしい激痛を覚えるどころか爽やかな解放感を味合いただ澄んだ眼球だけが事のなりゆきを冷静に観察している　高い天井をもつ四角い手術室の寝台のある壁の反対側には竈のある壇が置かれその上でめらめらと揺らめく聖火を中心にして祭壇が設けられている　アフラマズダとミトラの力強い立像がこの室内を厳粛な中にも高揚感を絶やさないといった趣きで牛耳っている　神官の最長老と思われる痩せぎすの老翁がその前に平伏し熱心に祭奠を唱い上げしばらくたつと永却の炎の中で清められている白い布を取り出しそれから銅製のリュトンの中で沸騰している赤葡萄酒を宮廷用に誂えられた車の付いた銀の膳に載せて運んでくる　七人の禰宜は〝サラマンダー……〟という文句を左回りに十一回繰り返してからすでに褐色に煮つまっている液体をエルドレの全躰に注ぎかけるそれから別の小壜に詰められている山羊の白い乳汁を三十回に分けてふりかけ十四本の手で一斉に筋肉と骨の細部にまで擦り込むとそれらの灰色の粘液が発光し次第に真っ赤な炎の舌をあげ始める　沈着聰明な長老がその上で白い布を翻えす　布がエルドレの躰を

包み込むとそれはあわただしく吸い込まれるように焙接され肉体の完璧な曲線をなしてゆくのである　これは正真正銘のサドラである　聖なる肌着はエルドレに与えられたのだ七人の司祭は雪の上に捧げられていた小山羊の毛から取り出した七十二本の糸をより合わせた紐をエルドレの頭に巻きつけると祭壇に頭を垂れて長い長い祈りに就くのである　灼け尽くすような光の大洪水　残酷で生命の源をことごとく呑み乾してしまう火刑の大劇場生物はあらゆる生物の種を狙い己れ以外の生物を絶対的な敵として尽きることのない攻撃を陰湿に繰り展げている　ああそこにもジャンピング・チョーヤの鋭い雨が降り注ぐ　メスキートやオコティーヨなどの灌木の密生するすぐ向こうにはサンド・ベルベナの紅潮した丘陵地帯が三日月状に散在している　自衛手段のために果肉を細らしている覇王樹の陰では角蜥蜴や後足の異常に発達した鼠や蟇蛙などが飛び出た目玉をきょろきょろさせながらコヨーテや穴熊や狐の夜間に敢行される狡猾な襲撃に備えて防塞を造っている　雛菊やエリオフィラムまたナマの黄色や白や赤や紫の可憐な花弁が蟻や蜂やハミングバードを誘っている一帯から遙か離れた彼方では肌を抉る凄々しい風が数十メートルも砂塵を舞い上がらせ魔可不思議な迷宮のシルエットを紫色の光の緞帳に映し出しまたたくうちに古代史の彼方へと包み込んでゆく　十億年もの歴史をもつ微粒子は不規則な風に運ばれ銀

色の星型砂丘を形成し地底を支配する魔王の熱い息吹によってめらめらと赤く怒張している　幾何学的なこれら巨大結晶巨大暗号巨大建造物群巨大人造湖巨人像巨大墳墓巨大性器巨大嬰児は燦く御影石の屹立する破片である　赤褐色のごつごつした断層を剝き出して滝のような砂の細流が潔々と飛沫をあげているのをはじめにして中途で括れている大きな岩の塊りや宙空に浮かんでそれ自身で大架橋をなしている巨岩さらに誇らしく天の中心を突き上げる数十メートルの直立する巌や波のように無数に拡がる純白の石膏砂丘を一望させて視界を凌駕する丘陵こそは素晴しく神秘に充ちた天然の大庭園である　ポリフノェ・ゼムレジェリエは永遠の都から一千万セスタースの黄金を吸い上げその中枢である大オアシスには幾種類もの樹木が豊かな水に祝福されて世界のありとある果物を撓わに実らせ鮮血のように美事な夕焼けが蒜と毒のある植物の華麗な花の乱舞を染めあげている　おお壮大な無機物の塩辛い砂の海原に浮かぶ夢の苑　だが蜃気楼は最も獰猛な凶である　そのような饅幕が千上ってゆくとエルドレを囲む地面は枯れかかった金雀枝の絨毯になる　汗を感じる余裕もなく急激に水分を奪われてゆく神殿址では司祭たちのうねるような低い祈禱が幻の中に新たなる幻を生み出している　七人の司祭たちは自らの術によって蜃のような蜃然とした永却の形に化身する　エルドレを制した屈強の衛士は青銅の自動人形のように排

色の帳の両側で槍を捧げたまま硬直している　灌木の茂みも一塊の砂に帰している　不動の静寂を背景にしてただ祭壇に赤々と燃え上がる炎だけが一切の生命の収束点であるかのようだ　中空でふん反り返っている邪悪なるものの舌に白い裸身を翻弄させながらエルドレはあの美しき国の彼方から不吉な砂煙が攻め込んでこようとしているのに気がつく　すでに死の呪いのうちに還りついているがらんどうの廃造物は腐蝕と退廃に供されまさに辺りの砂とともに崩れ落ち同化しようとしている　エルドレに施された夢はいったいどのような材質なのであろう　エルドレは勇士の彫像から錆びついた鎧を剝ぎ取ると徐々に紅を帯びている撓やかな肌に素早く装着する　身に纏うこの二重の衣はあってはならぬものへの断乎たる拒絶の姿勢である　生命の軀體のように無機物の堆の累積物を焦がしつづけている永却の火がその焰の中に澄み透った玲瓏な鏡を現し武装したエルドレの全身を悉く明瞭に映じている　この眼が映し出しているのは己れなのであろうかと嘆じると炎がひと揺れする度に二人さらにひと揺れすると四人というように鼠算式にエルドレの影が増え続けその数が四千九十六人に達すると次の十一回目の揺らめきで三百二十四人が加わり十二回目の揺れでは四百六十八人が独自に炎の尖端から現われ総勢四千八百八十八人の武士が十三回目の最も大きな揺らめきでエルドレの前に武装して登場する　精根を使い尽くして神

の火は千数百年の寿命を完うする　第十回目迄に登場した軍勢に十一回目の軍が加わりそれらは二千二十四人と二千三百六十九人の軍団とに再編され十二回目に生まれた残りの兵は二百二十人と二百四十八人の部隊とに分かれる　最も大規模な二つの軍団は槍と弩で武装した歩兵たちであり後の二つの小数精鋭部隊は赤毛の駿馬に跨り緑の紐のついた純血同盟の旗幟を靡かせ象の皮を幾枚も重ねた金糸の縫い取りのある楯を掲げ鋭い剣を煌かせて先頭に立ってエルドレの前に進み寄る　絶体絶命の窮地にあってエルドレは混乱と激しい恐怖を強いられるのだがこれだけの明白な予見を前にするとひらき直りとやけくそによって支配されてゆくのである　そうして危機の深いクレヴァスの底から得体の知れぬ自信が湧いてくる　余裕をもった眼で屈強の軍勢を観察すると兵士のどの顔も同じ眼つき一様の表情をしていて彼らの造作がまったく単一の法則によってなされているのを知ると親しみさえも感じるのだ　だがエルドレの貌と躰をもつ故に最も危険な幻の軍団は彼の目前に迫ってくると天地に轟く雷のように一斉に鬨の声を上げる　まさに風前の灯という一瞬にエルドレの脳裡にはここで断乎たる無援の逆襲を敢行するよりも何かの拍子であの兵どもの懐に紛れ込めば助かる糸口が手繰り寄せられるのではないかという思いつきが浮かぶ　エルドレはだしぬけに先頭の騎馬兵の廚っている馬の横腹に飛び込むとその兵士を叩き落と

し手綱を奪い取ってその馬をまわれ右させ力一杯馬の尻に鞭りを入れて馬群の中に突入する　前進していた騎馬隊の中に動揺と混乱が惹き起こされ馬と馬とがぶつかり合い嘶く馬上から何人もの兵が転がり落ちる　エルドレも馬の横腹から振り落とされ地面を転ってしまう　混乱は最大の母だと呟くとすぐさま手近の馬をつかまえてひらりと騎上する　それからゆっくりと騎馬隊の殿の方に潜り込んでゆく　まだ興奮から覚めやらぬ馬が前脚を小刻みに地面に叩きつけるのを眺めながら何喰わぬ顔を装って隣りの兵士に何が起こっているのかを問うてみる　だがエルドレの突差の思いつきもここまできて完全に覆えされてしまうのである　エルドレが声を出すと同時に馬の脚を注目していた両隣の兵士はさっと顔を引き締め馬体を寄せてエルドレの両腕と手綱を奪い彼を見抜いてしまったからだ　すると何の合図もなしに混乱はさあっと引いてしまいエルドレの前に道が開け最前いたと同じ場所に連れ戻されるのである　呪縛に充ちた六芒星章の南西に位置する地下の帝国　枯槁した生命の縁る幻想の織物に腐爛した設漿が唯一の輝きを与えようとしている　〝はじめに聖言ありき〟　以前にも以後にも何ものもなくことばはまず偽りの姿をとって誕生する不意に訪れる深夜のセールスマンは作り笑いをして鞄に隠し持っている怪し気な物体に能書を喋らせる　また場末の呑屋で三人の陰険な目つきをした極悪非道の道楽者たちが男色

を餌に若造にいいようにからかわれるという一幕ものの喜劇を開陳するのも装いのことばがその主調音である　不吉な怪物どもの巻き起こす暗い沙塵が迫ってくる中で風貌に感わされたにしても兵士たちの間に一言も交わされていないことにエルドレは気がつかねばならなかった筈である　とはいえその失策がどのように重大な局面に彼を導いてゆくのかをみるならば偽装工作はもっと遵奉されてしかるべきである　逆転した画面の結果元の映像にたち返るという見かけ上の出来事とは裏腹にエルドレの身に逼迫した危機は実にここで改めて解消されたからである　途方に暮れて茫然としているエルドレの前に四千八百八十八人の軍隊は整然と列をなし最大の敬意を示している　声をあげる者もなく不信のまなざしを向ける者もなく最も勇敢で忠実なる奴隷として最敬礼しているのである　エルドレはこの現象を解析しようと試みる　王家の血の故か　運命の好意なのであろうか　いやそれより早く己れの不動の地位と支配力とを熱い血流のうちに覚えている　二組の友愛数によって組織され統制された極めて専制的な純血同盟の軍団はまさしくエルドレが造物した狂暴かつ従順なる歴史の影である　風化して半ば砂に埋もれた古代の王たちのモニュメントであるスフィンクスが散在している墓の谷と称ばれる荒涼とした蟻地獄の彼方から激しく天空を覆う砂烟が押し寄せている　宙宇に吊られた鏡あるいは火球が邪悪な色彩に染まり

その縁辺は次第に暗黒の侵蝕に屈しようとしている　エルドレは配下の者が深淵の王国から掠奪してきた巨大な俾馬に跨るとあの隊商の列が富と欲望によって鍛えた広大な道を盟友たちとともに蕃地に駈け抜けてゆく　その向こうには墓の谷とそこに寝む怪物どもがばっくりと獰猛な口腔をあけて待ち構えているであろう　墓の谷の中央を横切っている乾上った河床の左側には無数の矢狭間をもつ五十ほどの矩形の塔をつらねたほぼ長方形の防壁に囲繞された城郭がある　この廃墟の真ん中を二十歩の幅をもつ大通りが貫きいくつかの横道がそれを分断して住民の居住区をつくっている　北部には広場と壮大な神殿が備えられその隣の一角に四十メートルの高さの三つの堂々たる長方形の塔をもつ矩形の宮殿が聳えている　その反対側の岸辺には完全なる円形の壁に包囲された城址がある　これらの文明の夢を潰滅させその死の容姿を守護しているのは世にも恐ろしい怪物どもの群である　粘菌類を巨大化した白色透明の醜悪なる生き物というべきであろうか　あの忌わしい食人鬼やヨグ・ソトホートの呪文によって現われる謎の物怪にとってさえも容易するような獣腐った魚の眼や臓物や鱗の間から湧き出してくる異臭の柔らかな羽根蒲団　息を封じてしまうような脂の強烈なやすらぎ　おお汚辱にまみれぬるぬるとへばりつき納豆の糸が泡を吐きながら彼らの　をつくっている茵のっぺらぼうで得体の知れない交接現場の貌と尻

縁毛もなく蓚もなく地獄の瘴気が凝縮しさながら状態の廃物となっているのであろうか
彼らはその微細な部分においてまず単一の個体でありながらその個々の悪夢の巨大な集積
という全体で唯一一匹の生き物なのである　動物磁気は彼らの生活を支配する夥しいエネ
ルギーであろうか　また穢された体液の混淆物こそ彼らのメスメリスムであろうか　互い
に喰い合いながらもますます増殖してゆく原生動物の処生原理で何を生み出そうというの
か　ありとある神々と自然とその被造物に敵意を抱き殺戮に明け暮れる哲学の大魔王たち
に祝福は常についてまわるものなのであろうか　エルドレは騎兵たちを怪物どもの左右に
陣取らせ歩兵のうち槍で武装した部隊を横十列に編成し前面に布陣させ最後に弩部隊をそ
の本隊の左右に位置させる　まず二つの弩手の部隊が雨霰のように宣戦布告の攻撃を始め
る　と同時に本隊が前進し鋭い得物を振りかざし怪物どもの前部側面を刺ぐように襲撃し
てから二手に分かれ敵の左右でそれぞれ隊列を立て直す　騎馬隊はそれより少しく時を外
らして後方を攻撃し後方の左右に改めて陣取る　執拗な剣離戦法と前後左右を常時固める
完璧な布陣によって怪物どもはその数を減少させられ中央に封ぜられ為す術のないまま緩
のように硬い一箇の円錐になってしまう　エルドレの軍隊は怪物どもを完全包囲し勝利を
目前にして一層血気にはやってゆく　しかしこの勇敢な攻撃はそれ相応の輝かしい武勲と

夥しい犠牲によって成し遂げられているために騎馬兵と歩兵の約半数が怪物どもの触手に捉われ半透明の袋の中で液という液を悉く吸い取られ無数の屍と化して砂漠の歴史に回帰しているのである　とはいえ造物主であり策謀に長けた軍帥であるエルドレの足許からむくりと影が起き上がり犠牲者と同数の勇者を生み出している　だが影が奪われるに従いエルドレは疲労困憊しまた兵自身の影も薄くなってゆき軍勢は弱体化している　最後の攻撃によって決着は早急につけられねばならないだろう　まさしく今こそが圧倒的な布陣の下に優勢なのだから　一斉攻撃の号令が発せられようというときにだが半数の兵をくわえ込んでいた怪物どもは凝縮を続け円錐の尖端に雷光を帯びそれから細密な鋒を生じいきなり以前の三倍の大きさに膨れ上がりその数は増殖することによって一挙に十倍になってしまうのだ　おおこの巨大化現象は攻防を逆転させてしまうに足りるであろう　エルドレは全軍に退却命令を下すがその伝令が駆け出している最中にも怪物どもの逆襲は獰猛を極めエルドレの影はますます薄くなってゆくのである　猛威を振るう邪悪な結菌類は容赦なく体液を求めて絡みつく　軍隊は鬨気楼だ　エルドレはもはや立ち上がることも能わずにじりじりと地を這って逃げ回る　今にも光と同化せんとする幻の純血同盟もただエルドレの姿の写し絵である　灼けつく光の大攻勢に乾ききった熱い岩肌を露わにした道の縁を踏えそ

の藤に踊り込むとエルドレは岩の間に不思議な植物が匿されているのを発見する　掬み上げるとちくりと指を刺すのである　褐色に萎びて今にも崩れそうな屈曲した莖がさっと青みを帯びるのを見てエルドレの記憶簿の頁に彩やかに朱で記された秘華葛ということばが浮かぶ　毒には毒と呟くと最後の力を振り絞って秘華葛の干莖を吸血鬼どもに投げつけるエルドレの消え入りそうな影たちもてんでに投擲する　おお海綿様緩肉質の内部をもつ莖は液体の獣に突き刺さりその汁を啜くうちに吸い込んでしまうのである　ぐえーっという低い呻きが谷を揺動するとみるみる成長している植物に絡みつかれて怪物どもはどんどん小さくなってゆく　今や塵と化した怪物どもは彼らと入れ替った毒草の茂みのうちに密封されているのだ　何という対症療法の見事なる勝利であろう　怪物の呪縛で実に数千年の荒廃を余儀なくされていた城は栄光も彩やかな祝福に充ちて蜃気楼のように荒涼とした砂漠の真ん中にその華麗なる姿を浮かび上がらせる　神々と呪わしきものたちとの諍いはここに終結をみるかのようだ　だがその邪悪なる物語は姿の定かならぬ主人公と同様の姿態を取るに過ぎないだろう　滅びるものはあらゆる滅びの予見である　蝉地獄の逆円錐の壁に囲まれた底では鬱蒼たる悪魔の藻木がすでに赤褐色に萎えた不吉な陽光に映えて妖しい気配を漂らせている　聖らかな至福に充ちたボウの叢とのなんという対照　母と妻と妹の

三位一体であるエレアとの恋はいづれに属すのだろう　闇に嘱くものたちの勢力が拡がるにつれ再び蘇ってゆく火と鏡とを材質にした逞しい武士たちを率き連れてエルドレはもう潤いを呼び戻した河の右側に高く堂々と聳える円形の宮殿に赴いてゆく　唐草のびっしり絡まった城壁を取り巻く幅の広い濠には巨大な跳ね橋が渡されている　音もあげずに橋が跳ねるのを振り返りながら無紋の矢狭間の並ぶ二つの円筒に挟まれた拱門に進んでゆくとその奥から明るい光とともに優雅で澄明なソプラノが和し甘美な娘たちの匂いが漂ってくる　城壁と円形の宮殿との間で輪を描いている庭園には色とりどりの花もさることながら涼し気に幾つもの噴水が高々と舞い上がり内部から綺麗な光を発する漏刻がそのひとつひとつの側に置かれている　武勇を誇ったり愛を主題にしたり厳そかに神々を讃えたり例えば木に縛りつけられた金髪娘とそれを襲うタイガーその娘のはだけた胸を窓から覗きみるハンターなどといった野外劇あるいは仮面劇を思わせる大小の立像が花苑や小鳥たちの囀る疎林の中に幾多並んでいることだろう　宮殿の高い入口は成金好みのごてごてとは異なり絢爛でありながら上品な装飾が施されていて当主の趣味の良さを感じさせる　その図柄は蝸を除立たせた四大の精霊のもので透き通るが如くのレリーフである　この宮殿の一階中央には縦に二つの矩形の大広間が続き廊下のように並び壁全体をカンヴァスにした絵に

は古今東西の動植物及び建物山脈運河湖が散り鏤められその手前の部屋はありとある絢爛豪華な快楽が象徴され奥の部屋には崇高な神々の園が美事に描かれている　高い天井に貼りつけられた星座は明るいシャンデリアに殷なく映し出され幻想的な物語が繰り展げられている　黒檀の円テーブルや大理石の瓶やマントルピースには細やかな彫刻が絵巻物のように飾られ金銀の食器には酒や数百種類の料理が盛られている　二つの広間に狭まれた鎧型の渡り廊下の中央に極めて深い井戸が掘られていてそこからは豊潤な匂いを湛えた黄金の美酒が湧き出ている　これらの中央を貫く通路の外側に沢山の数の個室が割り当てられそのどの部屋からも必ず二階へ通じることのできる螺旋階段がさらに外側に太い帯のようにして備えつけられている　屋上の庭園の真ん中に尖塔のような天文台が設けられその天文器械には蚕たちの製造した精巧なレンズが使用されている　快楽の広間に鮮やかな胸をもつあらゆる種族から選りすぐられた娘たちが幾千人といるのだろう　娘たちは細い躰にぴったり吸着する絹子織の胸や背中や太股の部分の切れ込みの深い衣裳を付けその中にはときおり一糸も纏わずに優れた肢体を晒けている者も見受けられる　大きな踊りの渦は強大な吸引力を備えいかに火と鏡とを材質にした四千八百八十八人の屈強な若者といえどもたちまち呑み込んでしまうのである　槍や楯や鎧や剣などの武具を悉く解除した若者たち

に啞せ返るような娘らの裸体が絡みついてくる　様々の形と組み合わせの豊富さで嬲いが繰り展げられる　大食漢は百二十の大皿に盛られた料理と三十の大樽に詰められた強い酒を平らげてしまう　そのような大食漢が少くとも五百人はいるのだ　性豪は一度に千人の女を相手にし五十回の腎水を迸しらせる　喉の良い者は古今東西二千の歌を披露する　そのどの一つをとりあげても一千行に及ばないものはない　力自慢の男は朋友の愛馬四百六十八頭と指揮官の巨大な悍馬を鎖で繋ぎ城外に引きづり出し深い濠の底に叩き込んでしまう　男たちの荒々しい咆哮と唸び泣くような女たちの激しい吐息が唱和しその切れ切れに獣の断末の叫び鞭の唸る音や神々を呪う罵声や糞尿の臭い乱れ飛ぶ血に啞せって惹き起こされる咳や嘔吐そして人肉の香ばしい匂い骸骨のからからぶつかる音や決闘に一瞬休止符を叩かれどっと湧き上がる響動めき蛇や嬰児を弄んでの笑い酒瓶の粉々に砕ける音や火の燃え上がる凄まじいバスそして狂気のソロが高々と歌われ尻をびしゃびしゃやるリズムや転がる食器やテーブルの上での複雑な嬲い変化に富んで組み合うもの大喧嘩大乱痴気にかなりな数の乳房や首や陰莖が供託され尽きることのない快楽の交響曲は壮大な仕上がりに向かっている　嬲いに食傷し強烈な乾きを覚えてエルドレは宮殿の中心にこんこんと湧き出る泉であの聖アントニウスの伝説にある数千の味覚を充たすという霊液を流し込み喉が

潤ってゆくと鮮の芯からめらめらと精気が立ち昇りその奥に通じている神々の広間へと誘われる　グリュフォンが人頭を踏みつけているさまを彫り込んだ荘重な大扉を押し開けると老女が柩に横たえられそれを囲んで若いびちびちした生け贄たちが裸のまま跪いている天使のように美しい姿をしている十一才以下の少年たちと頬を桃色に染めた可憐な少女たちが十数人づつ両側に膝をついて並び形のよい尻と胸をもつ二十才をようやく越えたばかりの選り抜きの美女数人が老女の頭の方に座っている　誠実な気持ちと淫らな情欲とが関ぎ合っているエルドレは柩に近づいて覗き込む　老女の容貌は気品のある鼻骨を中心にしてよく整っている　どこかで見覚えのある顔だ　だが過去は弔われつつある　黒塗りの柩の中で老女の唇は青みを帯び昔の栄華を刻みつけた細い裸体は透き通るように白くなるかすかな呟きが唇から洩れようとするがすでに力尽きただ頬の筋肉が顫えるばかりだ　そして異様に大きく翳んだ碧の瞳がその奥にちらちら赤い炎を揺らめかすとエルドレをじっと凝視めるのである　その最後の瞬間にエウスタキー管は開かれたのであろうか　尋常ではないことばの形に打鄣されてエルドレは一挙に狂乱の影を帯びる　荒々しい声で少年と少女たちに向かい合って並ぶように命じるとよく撓う鞭を各自に持たせ互いを打ちのめさせる　彼らの無垢な鮮はみるみる蚯蚓腫れを呈し蛇神の手下どもの無残なる巣窟と化す

エルドレは素裸の乙女たちの尻を情容赦なく鞭打ち前と後とを抜いて気をやりながら腰の短剣で豊満な乳房や美しい首筋をひと振りで刎ねてしまう　さらに少年と少女たちにそのどくどく溢れる血を貪るように命じその血と緑の饗宴の中で次々にまだ硬い針をもつ子供らを嘆い肉と銅でできた二種類の剣の餌食にしてしまうのである　それから祭壇を號倒しその火が脱ぎ捨てたばかりの衣から神々の壁画に燃え移るのを確かめるとやおら柩の中に踊り込む　エルドレは最前死んだばかりの老女を凌辱する　まだ生温いよく熟を極めた膣と肛門の中に夥しい液を注ぎ入れると老女の躰は死の姿のままみるみる若返る　おお何という素晴しい悪意　その至上の美貌はまさしくエルドレの実母の体である　猛り狂う逸物はだがなおも激しく漿液を噴き出すのである　少女の愛らしい姿から無邪気な子供へとさらに純白の嬰児へ退行し聖なる胎児の歴史を逐一回想してゆくとそれらの肉は消滅しエルドレの躰にはただどろりとした邪悪なる液体が残されている　柩の周囲に崩れている屍体が一斉に腕を上げ天井を指さす　エルドレは飛び起きると部屋の隅に設けられている螺旋階段をぐるぐるぐるぐる駈け上がる　二階には〝賢者の階段〟〝エリクシルを調整するときの輝かしい石の書〟〝秘密を開明することの書〟そしてあのゲーベルの〝慈悲の書〟や〝濃化の書〟さらに有名なるヘルメスの〝偽デモクリトスの書〟〝また〟天球分割の理解の

終局〃などという金箔で象嵌された題字をもつ古代の書物を厖大な書架に収蔵した立派な図書館や歴代の翕侯やその眷族を讃えた彫像や愛妾たちの肖像画を飾った美術館がある

だが今や紅蓮の炎に包まれそれら真昼の文明は滅びようとしている　階下ではおよそ一万人の若者がそれに殉じている　屋上の空中遊園の花々は炎の中で妖しく揺らめきその絶世の彩やかさは大饗宴の供物と化した焼け爛れる人肉を滋養にしているかのようだ　エルドレは階段を昇り切り中央に鋭く聳り立つ天文台に入り込みそこから空を見上げるとありとある喧噪がまるで他所事であるかのような美しい光景が展開されているのを知る　おお天を視よ　漆黒の夜空には流動体の火が流れている　様々の色特に紫や赤に変化する一条の焰から薔薇色の光沢をもつ色彩が発せられる　宙宇に一つの手が現われ薔薇色の光沢はまずその背後に密着しそれから包むようにその周囲を優しく舞っている　地獄第七界に君臨する大王は地上に顕現し人体宇宙の中枢に大洪水を齎すのであろうか　その色彩と手とはゆるやかな弧を描き彼方へ去りゆこうとするが今にも消え入ろうというあたりで停止しその地点に明るい光が現われる　手はそこからさらに後退しようとするが突然鳥に変貌してより自由に飛翔する　そのうち羽撃く大鳥は石のように硬直してなおも飛びまわる　それは最初真珠色の光沢をもっているがついには黒色に至ってこの天文台目がけて遂ちてこよ

うとするのである　空と地はこの天文台に向かって近づいてくる　周囲の色は灼けるような鮮紅色だ　あらゆる物質は焼かされてゆく　エルドレは世界の混淆とともに何処へ流されてゆくのだろう　出入口といえばあの青銅の衛士の守護する緋の扉しかないというのに